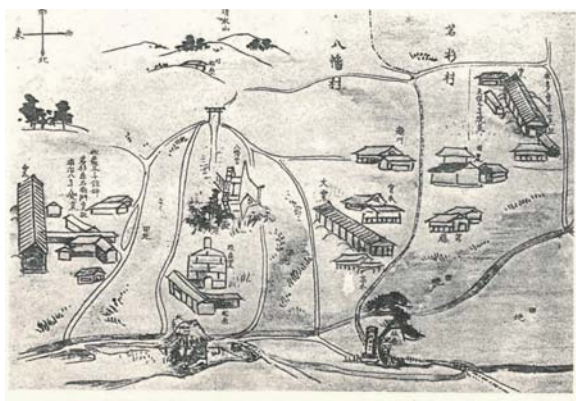


九谷焼の世界に触れる

ふかよみ九谷ヒストリア(全10話4話)
「再興九谷の柱 若杉窯探究」

加賀藩窯春日山窯に招聘された京焼の名工青木木米は、文化5年の金沢城大火の余波で待遇が悪化し、助工の本多貞吉を残し帰京しました。貞吉は陶石が採れる九谷村は遠いことから、近郊に同等の陶石がないか探索をし、ついに若杉村字六兵衛山に良質の陶石を発見しました。これを花坂陶石といい、現在も九谷焼素地の原料として使われています。



若杉窯 見取り図 『九谷陶磁史』(松本佐太郎著)より

貞吉は若杉村の十村(大庄屋のこ

と)林八兵衛が瓦や陶器を焼いていた窯で、この陶石を用いて磁器焼成に成功します。文化8年のことです。貞吉は肥前島原の生れで木米に伴い春日山窯に従事し、晩年、若杉窯の頭取として働き、若き陶工らを育成した名工です。窯主の林八兵衛は藩の保護奨励もあり、京都や平戸の陶工を招いています。文化10年には阿波徳島の赤絵勇次郎という上絵の名工が来窯し、陣容が充実しました。若き日の斎田伊三郎(道開)や九谷庄三も従事しました。だが、文化13年、藩は若杉窯を郡奉行の直轄とし、八兵衛に代わる管理者2名を派遣しました。翌年、「若杉陶器所」との名を使い始めています。藩は殖産興業として産業的に大規模化していきます。文政2年(1819年)の貞吉没後、藩の大量生産化を嫌う貞吉一門の陶工らがつぎつぎと他窯へ移り始め、郡奉行が有能な陶工に禁足令の措置をとるほどでした。一方で赤絵勇次郎を主工となし操業をつづけ、藩は他藩からの陶磁器の輸入を禁じまし

た。文政6年には金沢の陶器商橋本屋安右衛門を管理者とし、天保4年(1833年)に若杉の姓を安右衛門に与え、帯刀御免の恩典を与えました。ところが、天保7年に陶器所から出火して工場が全焼したため、窯を隣村の八幡に移しました。藩窯としての威容を誇り、量産経営を行いました。赤絵勇次郎が職長を退いたことや、隣村に小野窯が興ったことなどで、次第に不振となりました。明治2年(1869年)版籍奉還で藩窯に終止符を打ち、その後民営となり、窯業継続に努めましたが、ついに明治8年に廃窯となりました。製品は圧倒的に大量生産に向けた染付作品が多く、銘は「若」や「若杉山」「加陽若杉」と記されていますが、無銘のものもあります。花坂陶石場を擁し、再興九谷窯の柱として多くの若い陶工を育て近現代九谷に繋げた意義はとて大きいものがあります。

文・九谷焼資料館館長 中矢進一

ひぼ・ゆずのE3でごこっさ

【空き缶はどう分別??】

アルミ缶とスチール缶に分別し、軽く水洗いしてね。

- Point ① 缶詰やお菓子の缶、ふたもOK。マークで分別!
- Point ② ふた付き缶飲料のふたは「燃やさないごみ」へ。ふたの裏に加工があるのでリサイクルできません。
- Point ③ プルトブは取らないで。そのままリサイクルします。

※月末からの大型連休のごみ収集は、ごみ収集カレンダーでしっかり確認を!

問い合わせ 生活環境課 (☎ 58-2217)



人口と世帯数

2019年3月1日現在

- 人口 50,239人 (前月比+8)
男 24,944人 女 25,295人
- 世帯数 18,970世帯 (前月比+13)